



きくれんじ 菊蓮寺

基本データ 住所：常陸太田市上宮河内町 3600

公開時間	駐車場	写真撮影	スタンプ	トイレ	雨天時の 展示物変更
15 時まで	○	○	○	○	なし

解説動画 ※通信料がかかります

【文化財解説（菊蓮寺①）】お寺にまつわるさまざまなエピソードをご紹介します！

【文化財解説（菊蓮寺②）】「地獄に仏」ならぬ「地獄」と「仏」をご紹介します！



①



②

菊蓮寺の来歴

菊蓮寺は舍利山三光院と号する浄土宗の寺院です。大同 2 年（807）、金砂山の天台宗定源寺行讃上人の開山で、金砂山の社僧などの菩提寺として建立されました。その後一時廃寺となりましたが、寛正 6 年（1465）に浄土宗に改められ、現在に至っています。

本尊は阿弥陀如来、脇侍は観音・勢至^{せいし}両菩薩ですが、廃寺になった西金砂山定源寺のものと伝えられている仏像が残され、本堂前の収蔵庫内に安置されています。



菊蓮寺の指定文化財

○ 木造千手観音立像（附伝千手観音焼損像・附伝胎内納入供養札）

県指定文化財（昭和 54 年 3 月 8 日指定）【写真中央】

檜材寄木造りで、像高は 350cm です。石岡市の木造立木観音菩薩像に次ぐ県下第 2 位の巨像になります。圧倒される大きさとともに、重厚さと量感にあふれた像で、彫りの深い端正で面長な顔立ちをしています。平安時代末期、金砂の合戦で前の千手観音が焼損し、鎌倉時代になって新たに作られたもので、胎内供養札には寛元 2 年（1244）の記述があります。

伝千手観音焼損像【写真奥右】

元々の本尊として制作されたものと伝えられ、大きさは現在の千手観音像よりもやや大きい像高 368cm でした。金砂の合戦で、源氏の軍勢が佐竹氏を討つ際、放たれた火によって寄木造りの前部が焼失し、背面部が残存しています。制作年代は平安時代。徳一大師の作と伝えられます。

「伝胎内納入供養札」

現在の千手観音像の胎内に納められていた供養札で、寛元 2 年（1244）4 月の記述までは、はっきりと読み取れます。書かれている内容は、右の通りです。

○ 木造不動明王立像

県指定文化財（昭和 54 年 3 月 8 日指定）【写真右】

檜材一木造りで、像高は 162cm と等身大です。不動明王には珍しく姿態に誇張がありません。^{かるらえん}迦楼羅炎と呼ばれる火焰の光背は失われています。右の目は天を、左の目は地を見渡し、^{てんちがん}天地眼といって世界の全てを見通していることを表しています。古い天台形式で千手観音の脇侍となっています。制作年代は平安時代。^{たんけい}湛慶作と伝えられます。

○ 木造多聞天（毘沙門天）立像

県指定文化財（昭和 40 年 2 月 24 日指定）【写真左】

檜材一木造りで、像高は 168cm です。いかめしい容姿のうちに気品があり、腹部には鬼面の彫刻があります。^{ふんぬ}忿怒相で口を閉じ、左手には宝塔、右手には剣を持ち、やや腰を左にひねり、右足を少し開いています。古い天台形式で千手観音の脇侍となっています。制作年代は平安時代。湛慶作と伝えられます。

○ 木造女神像 県指定文化財（昭和 40 年 2 月 24 日指定）【写真奥左】

檜材一木造りで、像高 115cm の神像です。面相は虫害のため失われていますが、双髪を両肩まで垂らし、両手を胸前で供手した、いかにも女神らしい静かな姿です。上衣の刻みと背部の腰帯の刀痕には、力強さが見られます。女神独特の清澄な表現を示し、端正な像容の中にも、一種の幻想的な感を受ける像です。制作年代は平安時代。湛慶作と伝えられます。

一晩中、いつもお浄土から私に呼びかける声がする。先にお浄土へ往かれた方々は、私に念仏往生の真実なることを教え勧めている

夜も寿がら 雨のきしには よぶこと里
ふるさと人は 我生をすすむる 父母往生極楽為也
正五位上 前藏人左衛門丞 藤原良恒 今ハ諸国流浪許人勸進聖人生心
從二位上 大納言藤原兼良来迎 前竹前守源定綱往生極楽為也
正三位 中納言藤原家恒来迎 寛元二年四月〇日

「伝胎内納入供養札」

